
学校教育の場における障害児・者 福祉教育に関する一考察

～小学校での視覚障害体験学習（キャップハンディ活動）
の試みを通して～

日本ライトハウス

庄子 紀子

はじめに

1981年（昭和56年）から10年間、「完全参加と平等」をテーマとした国際障害者年が設けられた。その実現へ向けて掲げられた3つの柱のうちの1つに、「一般市民の理解の促進」とある。しかし、この部分は日本ではまだまだ遅れているというのが実情である。

筆者は、視覚障害者の更生援護施設である日本ライトハウスに勤務しているが、週に1時間、特別講義というものが設けられており、今まで何度か訓練生と一緒に所長の話を聞く機会があった。ある日の講義の中で、前述した一般市民の理解の必要性についての話があり、「理解の段階にとどまることなく習慣の段階までいけば、障害者は社会の中でもっと過ごしやすくなる」ということについて考えさせられた。そこから筆者が考えたことは、障害者に対する正しい理解を促すための取り組みは早期から行われる必要があり、そのためにはそれを教育の中にもっと取り入れていくことが必要ではないかということであった。このことの重要性は、福祉が充実しているといわれる諸外国での取り組みの内容を見るとよく分かる。

そこでこの論文では、学校教育段階での福祉教育（障害児・者の理解）について、小学校にスポットを当て、小学校段階ではどういう内容を扱うことができるか、また、試みとして1つの授業を考え、それを実践してみるとより学校現場で実際に授業として行う意義を明らかにし、「学校教育の場における障害児・者理解のための福祉教育」について一考察を加えてみたい。

そのために、まずⅠ章では、社会福祉教育として行われている「障害体験学習（キャップハンディ活動）」について、その内容、および学校教育の場におけるキャップハンディ活動の意義を明らかにする。これらをもとに、Ⅱ章では障害児・者理解のための福祉教育の授業案を考え、実践・検討を加えていく。

I. キャップハンディ活動とは

1. キャップハンディとは

「キャップハンディ」（CAP-HANDI）とは、handicap の handi と cap の部分を逆にいれかえたことばである。その意味するところは、日常の生活に障害をもつ者が負わされた不利な条件を、逆に健常者にも負わせることで、「障害をもたない者に、障害をもっている人の立場に立って考え、行動する姿勢をもたす」ことにある（安藤ら、1987）。

したがってキャップハンディ活動は、「参加者に、ハンディキャップをもつ人の状況をいくらか体験させることを目的とした活動である」と定義づけられる。リハビリテーションの分野では、障害ということを①機能・形態障害、②能力障害、③社会的不利の3つに大別しているが、これらを用いて説明すれば、キャップハンディは、体験者に①の機能・形態障害との能力障害の部分を直接的に体験学習させることで、間接的に障害をもつ人にかかる社会的不利の存在を感じとらせることができると言える（安藤ら、1987）。

2. キャップハンディ活動の内容

キャップハンディ活動は、1970年、デンマークで行われた YMCA のスカウト合同キャンプで初めて試みられている。日本へ紹介されたのは6年後の1976年で、資料1はこのとき行われた活動の内容を示したものである。

キャップハンディ活動では、このように参加者がすべての障害をきちんとした形で能率よく体験することが要求されており、それを通しての各障害間の質的差異と、それにともなう社会的不利、援助方法の確認が重視される（安藤ら、1987）。

3. 学校教育の場におけるキャップハンディ活動の意義

学校教育の場での障害児・者理解のための福祉教育の現状を見ると、障害を

資料1. 第2回日本アグーナリーでの実施内容

順序	学習内容
キャップハンディセンター	オリエンテーション(障害理解のための予備知識)
1. 視覚障害体験コーナー	盲体験 ○目かくしをして150m先の音源(太鼓)まで歩く ○手ざわりキムスゲーム ○点字カードを解読 ○目かくしゴロキャッチボール
2. 肢体不自由体験コーナー	車椅子体験 ○車椅子に乗ってスラローム状の場所を通過 上肢不自由体験 ○非利き手での描画 ○非利き手での図形の切り抜き 下肢不自由体験 ○片松葉杖、片足使用で水入りコップをのせた盆を片手で持ち、テープルまで運ぶ
3. 聴覚障害体験コーナー(言語障害を含む)	リップ・リーディングの体験 ○相手の唇の動きを見て、内容を理解する
4. 視覚障害体験コーナー	盲体験 ○視覚障害者を実際に誘導
5. 精神遅滞(情緒障害を含む)	講義 ○精神遅滞・情緒障害者理解の要点

資料2. アメリカの小学校における実践

授業時間	4ヶ月間にわたる合計8回のセッション(1セッションは2時間を単位)
障害の種類	盲、ろう、ちえ遅れ、肢体不自由
授業構成	・模擬体験活動 補助、補装具の操作 大人の障害者との話し合い ・映画、ビデオ、スライド、プリント類による学習 ・グループディスカッション
指導者	訓練を受けた教師、両親およびボランティア

資料3. 授業案作成にあたって配慮事項

- ① 普通学校の教員が指導にあたることを考え、指導者の負担ができるだけ少なくするために、指導に必要とされる専門的な知識や技術があまり多くならないようにする。
- ② 学校現場では時間的なゆとりがあまりないことから、できるだけ1時間(45分)の授業時間内でできる内容にする。
- ③ キャップハンディ活動は全障害(肢体不自由・視覚障害・聴覚障害・精神遅滞)を同時に体験することが要求される(前章参照)が、上述した①、②の点と筆者の立場を生かすことを考え、今回は「視覚障害」についてのみ扱う。
- ④ 指導者には、事前に専門的な知識や技術について理解を深められるように、資料・写真等を用いて説明をしておく。
- ⑤ 授業案はあくまで案として授業者に提供し、それを授業者に検討してもらう。授業案の変更等は授業者の一存に任せること。

もつ人に対する関心が学校教育において低いことが言われている（安藤ら、1987）。これには様々な事情もあるであろうが、その原因として、①教師側の事情（理解不足、負担増）、②時間的問題（ゆとりの無さ、調整不足）、③地域の理解不足、④児童側の意識の低さ、消極性があげられている（安藤ら、1987）。

こうした実情を考えると、教師を含めて、短い時間、少ない予算内で、児童の意識を高めつつ行うキャップハンディ活動は、学校教育の場での福祉教育として、まず、障害入門（2重下線は筆者）という位置づけで試みるべき有効な手段だと考えられる（安藤ら、1987）。この「障害入門」というところに、学校教育の場におけるキャップハンディ活動の意義があると言える。

大阪府下における活動の実践例を見てみると、平成3年度の学童生徒のボランティア活動普及事業の活動報告書によれば、小・中学校合わせて115の実践校のうち7校（小学校88校のうち3校）が、何らかの障害のキャップハンディ活動を実践している。また、他府県下での実践も、福祉だより・新聞等で紹介されているのをいくつか目にしているが、いずれもその意義は大きいことが報告されている。

また、諸外国での実践例は、安藤ら（1987）が「ハンディキャップ・オリエンテーリング」の中で、アメリカの公立小学校とオーストラリアの幼稚園での実践を紹介している。資料2は、小学校での実践を要約したものであるが、小学校で正規のカリキュラムの中に位置づけ、担任が授業として行っている点が大変興味深く、次章で授業案を考えるにあたり参考になった。

II. 小学校での視覚障害体験学習の試み

1. 授業案作成にあたっての配慮

前章までで述べたことをもとに、福祉教育の一環として障害体験学習の授業を考えてみた。その際、考慮したことについて資料3にまとめた。

2. 授業案

(1)題材について

体験学習で扱う内容は、キャップハンディ活動の過去の実践例を参考にして

いる（安藤ら、1987）。また、資料4に示した授業前の子ども達の意識調査の結果も考慮している。

手引きについては、白杖による単独歩行体験の後に体験することにより、私達がどんな「思いやり」をもって、より現実的な場面で障害者と接していくべきかが具体的に分かる。つまり、単なる介助法の体験だけにとどまることなく、よりよく障害を理解するための体験学習になる（安藤ら、1987）と考え、活動の中に取り入れた。また、点字はより専門的な知識が要求されると考えたので、取り入れなかった。

（2）授業案の内容

資料5は、白杖を使った歩行・手引きの体験の授業案である。

指導過程の(3)と(7)に「事前・事後アンケート」の実施が入っているが、これらは同一内容である。これらは、日常、自分が頭で考えていることと、実際、体験することによって感じることの相違を比較する、つまり、体験を「自己評価」することを目的として行う。この自己評価はキャップハンディ活動の重大なポイントである。これによって、障害をもつ人々に対する考え方や自分の生き方、社会のかかわり方などについて再認識する機会が得られるので、その理解はずっと深まることになる（安藤ら、1987）。今回は、1971年に実施された日本アグーナリー（障害児スカウトによる全国キャンプ大会）で見学者を対象に行ったアンケートを参考に文を補う形式にし、その中の「障害者は」の部分

資料4. 授業前の子ども達の意識調査（H4.6.18実施 複数回答）

目の不自由な人はどんなことをするのがたいへんだと思うか		
移動…33 (歩く:24 階段昇り降り:3 外出:2 通学:2 移動全部:1 杖が人にぶつかる:1)	電話…7 (書く:3 読む:2 話す:1)	買い物…4 日常…2 (衣服着脱:1 洗顔:1)
食事…10	入浴…6	
トイレ…9	家事…4 (調理:2 掃除:1 手芸:1)	

資料5. 授業案

(1)題材 「視覚障害体験学習」 白杖を使った歩行体験・手引きの体験

(2)ねらい

- ◎視覚障害体験学習を通して、視覚障害者に対する正しい理解をもたせるとともに、障害者理解の人門として、そのきっかけとさせる。
- ①目かくしをして一時的に視覚欠損の状態をつくり、空間を「移動」することで、視覚からの情報が得られないということが私達の行動にどのような影響を与えるかを、具体的な体験として理解し、視覚障害者の心理的一面を身をもって学習させる。
 - ②白杖を使った歩行体験を通して、私達がどんな「思いやり」をもって、障害者と接していくべきかを考えさせ、手引きの体験をさせる。
 - ③障害体験と合わせて、視覚障害者に関するスライドを見ることによって、視覚障害者に対する正しい理解を深めさせる。

(3)指導計画

- ・白杖を使った歩行体験・手引きの体験……………1.5 時間（学級活動）

(4)準備物

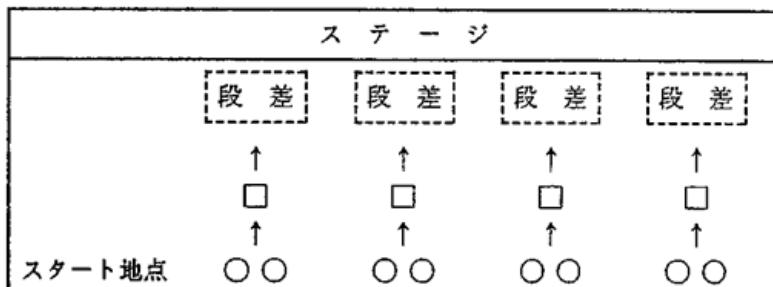
●教師

- ・フラッシュカード（学習内容提示）
- ・パネル6枚……①白杖を持って歩行している視覚障害者
②白杖の役割 ③白杖の使い方 ④手引きのしかた1
⑤手引きのしかた2 ⑥手引きのしかた3
- ・スライド用フィルム20枚 ④音楽テープ ⑤歌詞カード ⑥映写機、テレビ
- ・白杖1本（折りたたみ式のもの～提示用）・授業前の子ども達の意識調査用アンケート
- ・事前・事後アンケート（同一内容） ⑦体育用マット4枚 ⑧跳び箱1段を4個

●児童

- ・筆記用具 ⑨目かくし（各自） ⑩雨具用傘（2人で1本程度）

(5)会場図(体育館)



※段差=体育用マット、□=障害物（跳び箱1段）、○○=児童（2人1組）

(6)指導過程

学習活動	指導上の留意点	準備物
○第1時(体育館・会場の設定は休み時間のうちにしておく)		
<導入：1～2分> (1)パネル①を見ながら、教師の発問について考える	•自由に発言させる •できればそう考えた理由も述べさせる	パネル①
①この人はどんな人だと思いますか。 ②この杖は何のために持っていると思いますか。		

<p><展開1：7～8分></p> <p>(2) 本時の学習内容を知る</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">目かくしをして目の不自由な人に似た体験をしてみて、目の不自由な人（視覚障害者）について考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目かくしをして歩く体験 ・手引き（手助け）の体験 <p>(3) 事前アンケートに答える</p>	<p>授業前の子ども達の意識調査用アンケートの結果から多かった回答を知らせ、体験学習の動機づけとする</p> <p>Q. 目の不自由な人はどんなことをするのが大変か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動（歩く）～多数回答 ・食事 ～10名 <ul style="list-style-type: none"> ・「視覚障害者」…用語説明 ・回答の仕方について説明をする ・終了後、回収する 	<p>フラッシュカード (学習課題)</p> <p>事前アンケート用紙</p>
<p><展開2：20分></p> <p>(4) 体験学習1…………歩行</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">白杖の役割と使い方の説明 (パネル②③)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コース……スタート→障害物→段差（よける）（あがる）（おりる） ・2人1組、1人が目かくし、1人補助 ・交替で体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・「白杖」用語、役割、使い方の3点を説明する ・説明の際に、实物（折りたたみ式）を提示し、理解の助けとさせる ・必要があれば、白杖の形にはいくつかの種類があることを補つておく ・補助の子供には隣に付き添わせ、危険なときに声をかけるよう話しておく 	<p>パネル ②③</p>
<p><展開3：15分></p> <p>(5) 体験学習2…………手引き</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">手引きの方法の説明 (パネル④⑤⑥)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コース……スタート→障害物→段差（よける）（あがる）（おりる） ・2人1組、1人が目かくし、1人手引き ・交替で体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手引き」用語、手引きの基本姿勢、狭所の通り抜け、段差のあるところ、の4点を説明する ・体験学習1での体験を生かし、障害者の立場にたって、どんな思いやりの気持ちをもって障害者と接していくべきかを考えながら、体験させるようする 	<p>パネル ④⑤⑥</p>
<p>○第2時（体育館の後片付けをして、教室へ移動）</p>		
<p><展開4：15分></p> <p>(6) スライドを見る 『青い空と白いつえ』 ～ノンちゃんとともに～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害者の生の声を聞き私達がどう接していくべきかを考えさせる ・最後の歌の場面で歌詞カードを提示する 	<p>テレビ フィルム 映写機 歌詞カード</p>
<p><まとめ：10分></p> <p>(7) 事後アンケートに答える</p> <p>(8) 感想を書く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケートと同じ内容の事後アンケートを実施し、体験前と体験後の視覚障害者に対する考え方の変化を認識させ、障害者に対する正しい理解を深めさせる 	<p>事後アンケート用紙 感想用紙</p>

を「目の不自由な人は」に変えて使用している。

指導過程の(6)にスライドの観聴があるが、これは筆者が作成したもので、これには以下のような意図がある。障害体験（キャップハンディ）は、ややもすると障害に対する恐怖心を深める結果のみに終わってしまうことが考えられる。徳田（1989）によれば、視覚障害者に対する社会の人々の態度を改善するための方法として、視覚障害の状態をシミュレート（模擬体験）する方法を用いると、失明に対する恐怖がたいへん強くなるという結果も報告されている。この弊害を少しでも取り除くために、障害者の生の声を聞いてその生活の一端を知ることにより、視覚障害者に対して正しい理解をさせたいと考え、視覚障害者の立場から描いたスライドを作成した。スライドの内容については、資料6に示す通りである。

3. 実践

実践を依頼したのは、宮城県遠田郡田尻町立田尻小学校の5年生である。この学校では「福祉教育」を校内研究のテーマとして取り組んでいる。当日、筆者は授業の参観ができなかったので、ビデオでの記録をお願いした。

資料7は、資料5の授業案を授業者に検討してもらい、完成した指導案のねらいと指導過程を示したものである。時間を短縮して60分扱いとしたため、指導過程の中で若干削除してある部分があるが、大まかな流れは同一である。

また、指導案の中に、「事前・事後アンケートの実施」が記述されていないが、「事前アンケート」は授業の数日前に、「事後アンケート」は授業の最後で感想と一緒に書かせている。

4. 実践のまとめと考察

(1)事前・事後アンケートの結果から

資料8は、事前・事後アンケートの内容と結果を示したものである。このアンケートを実施してみていくつか問題点があったので、それを資料9にまとめてみた。①～③は、教師の補足説明によって補える部分もあると思われるが、対象とする者の年齢に合わせてアンケートの形式を変える必要があるであろう。

資料8の結果から、全項目に共通して、事後アンケートでは「無記入」の回答が減少しているのが分かる。事前アンケートでこの回答が多いのは、この地

資料6. スライドの内容

スライドNo.	説明内容(朗読テープ)
1	『青い空と白いつえ』～ノンちゃんとともに～
2	私はノンちゃん <ul style="list-style-type: none"> はあーい、私はノンちゃんでーす。私は26才の乙女。健康なんだけれど目は不自由なの。生まれたときから視力が悪く、大きくなるにつれてだんだん目がかすむようになって、昨日見えたものが今日見えなくなるというふうにみるみる視力が落ちていったの。一時は目の前が真っ暗になつたりしたけれど、今は、深い霧の中でヘッドライトの明かりを見るように、光を感じることができるわ。
3	なぜ一人で歩きたいの？ <ul style="list-style-type: none"> なぜ一人歩きするの？」とたずねられたら、ノンちゃんはすぐに「自由になりたいから」と答えるわ。一歩うちを出たら、自動車が猛スピードで走っている、複雑なまちの構造。「そんな所を視覚障害者がノコノコ一人歩きするなんて危ない」「もし火事や地震が起こったらどうするの？」「危険だから一人歩きはおよしなさい」と親切に忠告してくれる人もいる。確かに今のまちの構造は、障害をもったノンちゃんには危険がいっぱい。だからといって、出かけるたびに親や兄弟に連れていくてもらうのもお互いにたいへんだと思うの。それに、もし家族の者がいなくなったら、本当に困るのはノンちゃんよ。
4	どうしてひとり歩きできるようになったの？ <ul style="list-style-type: none"> ノンちゃんには、視覚障害者の友達が何人かいたの。だから、目が見えなくなったら、まず、白杖を使って歩く訓練を受ける必要があることもよく知っていたわ。そこで、訓練をしてくれる先生にお願いして会社が終わってから訓練を受けることにしたの。家と会社の間の行き帰りのコースを覚える目的で、1週間に1回1時間半くらいの時間を使い、2ヶ月間おこなわれたの。初めはつらかった。実際に道路に出たときは、もうメチャクチャだった。歩くのが精一杯で、余裕なんかありやしない。「杖がちゃんと振れないよ！」「危ない！自動車に向かって歩いていい」とおこられてばかり。本当に悲惨だったわ。でも、人間って不思議ね。初め50分かかっていたのが、今では、15分位で歩けるようになったから。
5	<ul style="list-style-type: none"> そして、今度は電車の乗り降りや、ノンちゃんが希望する場所へ行くための訓練が始まったの。初めて訓練を受けるときと違い、ひとり歩きが何とかできるようになっていたので、今度は、体も心もすいぶん楽だったし、だんだんひとり歩きが楽しくなってきたみたい。初めて電車に乗って、大阪へ出かけたときはうれしかったわ！まるで、人類の大発見をした博士みたいに、「やったあー、自分で歩ける繩張りが増えたぞー！」っていう感じ。あの感激を何回も味わいたいと、ノンちゃんは思っているの。

6	ノンちゃんのSOS大作戦	<ul style="list-style-type: none"> — SOS大作戦って、それなあに？ SOSサインのことよ — SOSのサイン？つまりね、ノンちゃんが一人で歩いていて、道に迷ったなあと思ったとき、事故りそうだなと思ったとき、自分が歩いている位置を確認したいときなど、道を歩いている人達に、「教えてください」「手を貸してください」と声をかけることよ。 — なるほど。あなたは視覚障害者が道を歩く場合、車が通らない静かな道が安全だとおもうでしょ？ところが、そうじゃないのよ。それはね、道に迷ったとき、自分の歩いている場所を確認したいとき、人に尋ねことができないからよ。
7	出会いは声かけからはじまる	<ul style="list-style-type: none"> 視覚障害者をまちで見かけて、『大丈夫かな、どうしてあげたらいいのかな』と思うことがあったら、まず声をかけてほしいの。視覚障害者って相手の動作がみえないでしょ。だから、急に体に触れられたり、いきなり手を持たれたりすると、『何が起こったのかしら』とびっくりしてしまう。声かけは、視覚障害者と友達になるための大切なポイントよ。
8	ノンちゃんたちの4つのお願い	<p>① こんなとき声をかけてほしい</p> <p>ア プラットホームで白い杖を見かけたら</p> <ul style="list-style-type: none"> プラットホームは、視覚障害者にとってこわい場所。特に、ホームの両側に線路がある島式ホームはおそろしい。片方に壁のあるホームは壁に沿ってあるけばいいでしょ。でも、島式ホームは平均台みたいじゃない。だからうっかり方向をまちがえたら、あっという間に落ちてしまうわ。実はね、ノンちゃんもホームから落ちて、危うくあの世へ行くところだったの。こうした事故を防ぐためにも、ぜひあなたの一声、ほしいわね。
9	イ 空いている席をさがす	<ul style="list-style-type: none"> すいた電車の中で席をさがすのは一苦労。白い杖でお客さんの足元をゴソゴソしていると、かっこ悪いやら恥ずかしいやらみじめやらで、いやになるわ。こんなとき「空いている席はあなたの前ですよ」というふうに教えてもらいたら、どんなに助かるかしら。
10	ウ 列の後ろはどこ？	<ul style="list-style-type: none"> 視覚障害者にとって、バス停などで、列の後ろをさがすのは難しい。よくわからないので、「列の後ろはどこですか」と尋ねると、たいてい「いいですよここに並びなさい」と言われる。目が見えないから、列に割り込んでも仕方がないということかしら…。でも、ちゃんと並んでいるのに、私が割り込んだために座れなくなる人もいるわ。だからこういうときは、尋ねられたとおり列の後ろを教えてほしいの。
11	エ 誰かに尋ねたいのだけれど…	<ul style="list-style-type: none"> 立ったままあたりをキヨロキヨロ見回したり、同じ所を行ったり来たりしている視覚障害者を見かけたら、困っているのかもしれないわ。ちょっと声をかけてほしいの。
12	オ 道路や踏切を渡ろうとしていたら	<ul style="list-style-type: none"> 道路や踏切を渡ろうとしている視覚障害者を見かけたら、迷わず声をかけてほしいの。

13	<p>② 自転車に乗っているあなたへのメッセージ</p> <p>視覚障害者にとって自転車はやっかいな乗り物。その理由はね…</p> <p>カ 自転車は音もなくやってきて、突然杖にぶつかってくるの。一瞬何が起きたかと思って心臓ドッキンとするのよ。車と違って自転車は近づいてきてもわかりにくいものよ。白い杖が見えたなら、気をつけてほしいの。</p>
14	<p>キ 杖の前を堂々と斜めに横切る自転車。もし、杖が車輪にひっかかるたら大変よ！</p>
15	<p>ク 自転車置き場ではないところに置かれた自転車。まちへ行くと、歩道の上に自転車が何台も置かれてあるわ。そこを歩くと、杖が車輪にひっかかるし、ハンドルで胸を打つし…。安心して歩けないの。</p>
16	<p>ケ これは、視覚障害者のために道に敷かれている点字ブロックというものよ。この上にものが置かれてあって困ることがあるわ。</p>
17	<p>③ 手引きを始める前にひとこと聞いてほしい</p> <ul style="list-style-type: none"> 手引きをしてもらうときに、手を引っ張られたり、後ろから押されたり、
18	<p>白杖を持たれたりすると、とても恐いのよ。「手引きしましょうか。どういうふうに手引きしましょう」というふうに聞いてほしいの。</p>
19	<p>④ 断られても怒らないで</p> <ul style="list-style-type: none"> 視覚障害者に手助けを断られても「何よ、人がせっかく親切に声をかけてあげているのに」なんて怒らないで。ほとんどの視覚障害者は、あなたの手助けを感謝しているわ。断るときは何かわけがあるんだと思うの。
20	<ul style="list-style-type: none"> 今まで、ノンちゃんの話を聞いてくれてありがとう。 最後に、ノンちゃんの好きな歌を紹介するわ。 <p>~~~~~</p> <p>いのち輝かせて</p> <ol style="list-style-type: none"> まちを歩く 白いつえのわたしに さしのべられた手 小さな愛に ささえられて きょうも わたしは歩く ほほえみ うかべて 自由を もとめて いのち かがやかせるために きょうも わたしは歩く きのう出会った やさしい友が わたしに 教えてくれた ふれあうことの すばらしさ むすぶ手 手のぬくもりを ほほえみ うかべて 自由を もとめて いのち かがやかせるために きょうも わたしは歩く

資料7. 実践した指導案（ねらいと指導過程）

学習指導案(学級活動)		
○題材名	視覚障害の体験をしよう	
○本時のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・目かくしをして歩行することにより、その大変さに気付かせる。 ・スライドを通して、視覚障害者への手助けの仕方をわからせ、進んで手助けをしようとする意欲を育てる。 	
○指導過程		
学習活動		
1. 本時の学習内容を知る (5分)	<p>目かくしをして目の不自由な人に似た体験をしてみて、目の不自由な人について考えてみよう。</p>	
・白杖の使い方を知る	・振り回さないように注意する	・カード ・白杖
2. 体験学習1 (15分) ・目かくしをして歩く体験をする	・2人1組 (補助の子は隣に付き添わせ、危険なときに声をかけさせる)	・手ぬぐい ・かさ ・マット ・発泡スチロール
※マットはよけて歩く ※発泡スチロールはのぼって下りる	◎友達の安全に気を配ったか	
3. 体験学習2 (15分) 手引きの方法を説明する	・基本姿勢、狭いところの通り抜け、段差のあるところの手引きの指導 ◎体験学習1での体験を生かして思いやりの気持ちを持って手引きができるか	
4. スライドを見る (15分) 「青い空と白い雲」	・視覚障害者の声を聞いて、どのように接したらよいか考えさせる	・テレビ
5. まとめ (10分) 感想を書かせ発表させる	◎自主的、自発的に、援助の手をさしのべられるような「思いやり」の心が育ったか	

域の子ども達には視覚障害者の存在が身近でないことから、イメージしにくいためではないかと考えられる。この結果から、この学習によって具体的なイメージを多少なりとももつことができたと考えてよいと思う。表の中_____で線を引いた部分に注目すると、障害を持つことの大変さが分かり、視覚障害者に対して

好意的に接しようという、言わば視覚障害（者）に対する理解が深められたと言えるような回答が増大していること、また同様に失明状態への恐怖心も増大

していることが指摘できる。

(2)児童の感想から

資料10は、授業後の児童の感想を何例か紹介したものである。これらをもとに考察したことを以下にあげてみる。

- ・スライドの内容をもとに述べた感想が全体の3分の2位あることから、こうした視聴覚教材が子ども達に与える影響が大きい。
- ・「…遊びでやったことがあった…」という感想がある。子どもに限らず、晴眼者はゲームなどの遊びの中で目かくしをすることがあり、これは言ってみれば視覚障害の疑似体験と言える。しかし、これはあくまで遊びであり、その中に視覚障害を体験しているという意識は無い。このことは逆に言えば、視覚障害の疑似体験としてやっていることが、ともすると遊びの感覚でやってしまう（特に子どもの場合）危険性があるということにならないだろうか。キャップハンディ活動の目的を子ども達にきちんと理解させた上で行うことが重要である。
- ・障害を克服し、がんばっている視覚障害者の姿を評価した感想が少なかつた。視覚障害者の姿をより正しく理解させることをねらうならば、例えば訓練施設等で訓練を受けているような実際の姿をスライドにして見せる方が良いのではないか。

(3)事後検討会（授業後の話し合い）から

資料11は、授業後に行われた、授業についての検討会での話し合いの記録である。本論文に関係のある部分を筆者が抜粋している。

まず、こうした授業について先生方がどのような感想をもったかを見ると、こうした体験をすることの意義を感じたというものが多く、このことから、教師は授業として扱うことの必要性や重要性を充分認識していることが分かる。

次に、先生方から出された意見をもとに、授業の指導内容や指導過程について改善できる点を考えてみる。

- ・体験後の感想を、目かくしして歩いた子どもだけでなく手引きをした子どもにも聞くと、どんなことに気をつけながら視覚障害者に接するとよいかもっと深く考えさせることができるのでないか。

資料8. 事前・事後アンケートの内容および結果
(設問に続く言葉を考えてもらう)

設問	カテゴリー	事前調査	事後調査
I 人は 自由な 目	1. たいへん、苦労している 2. かわいそう、悲惨 3. 不便、不自由、何も見えない 4. 何をしているのだろう 5. 白い杖で歩いている 6. 何かあったら声をかけて 7. 無記入	11(33.3) 11(33.3) 5(15.2) 1(3.0) — — 5(15.2)	21(67.7) 5(16.1) 3(9.7) — 1(3.2) 1(3.2) —
II 私は 自由な 人に 比べて 目の は	1. 幸せ、いい、いろいろできる 2. らくだ、ました 3. 健康、目がいい 4. 目が見えるので教えてあげたい 5. 無記入	20(60.6) 4(12.1) 7(21.2) — 2(6.1)	9(29.0) 13(41.9) 8(25.8) 1(3.2) —
III 私は 目 に 対 して は 自由な 人	1. 親切にする、世話をする 2. たいへんそうだと思う 3. 困ること、嫌なことをしている 4. 何もできない 5. がんばってほしいと思う 6. あまりひどくないと思う 7. 何を思っているのかなあと思う 8. 目が早く治って欲しい 9. 無記入	3(9.1) 2(6.1) 1(3.0) 1(3.0) — — 1(3.0) 1(3.0) 24(72.7)	11(35.5) — 1(3.2) 1(3.2) 1(3.2) 1(3.2) — — 16(51.6)
IV 私は 目の こと を は 自由な 人	1. かわいそうに思う 2. たいへん、苦労していると思う 3. やさしくしてあげたい、どうにかしてあげたい 4. ばかにしている 5. 何も考えてあげていなかった 6. 気にしていない 7. えらいと思う、尊敬している 8. 見たことがある 9. よくわからない 10. 無記入	17(51.5) 2(6.1) 3(9.1) 1(3.0) — — — 1(3.0) 1(3.0) 8(24.2)	13(41.9) 4(12.9) 5(16.1) — 1(3.2) 1(3.2) 5(16.1) — — 2(6.5)
V もし 私が も う 自由な 人 だ たら	1. つらい、嫌だ、悲惨 2. 何もできない、迷惑をかける 3. どうするかわからない 4. 親切にしてもらいたい 5. 早く病院で治したい 6. 無記入	10(30.3) 11(33.3) 1(3.0) 1(3.0) 1(3.0) 9(27.3)	13(41.9) 9(29.0) — 7(22.6) — 1(3.2)
VI 私の と 友達 は なる こ と は 自由な 人	1. いいこと、大切 2. 別にかまわない 3. できる、できるかもしれない 4. よいのかもしれない 5. むずかしい、はずかしい 6. 無記入	7(21.2) 4(12.1) 3(9.1) 1(3.0) 4(12.1) 14(42.4)	14(45.2) 3(9.7) 7(22.6) — 5(16.1) 2(6.5)

■社会は目の不自由な人に ■対して	1. 親切	5(15.2)	8(25.8)
	2. やさしくしてあげるべき	2(6.1)	2(6.5)
	3. 親切な人もいるが、嫌う人もいる	1(3.0)	—
	4. しらんぶり、何も思っていない	1(3.0)	3(9.7)
	5. ばかにしている、嫌なことをしている、 気持ち悪いと思っている	1(3.0)	7(22.6)
	6. すごいと思っている、尊敬している	1(3.0)	1(3.2)
	7. かわいそうだと思っている	—	1(3.2)
	8. たいへんだと思っている	—	2(6.5)
	9. どう思っているか知りたい	—	1(3.2)
	10. 何でもわかるようになってほしいと思っている	—	1(3.2)
	11. いろんなことをしている	—	1(3.2)
	12. 無記入	22(66.7)	4(12.9)
■も目入なしのうつあくてたな自くらた出る・のなこ・組人と・にがに	1. 親切にする、仲良くする	18(54.5)	17(54.8)
	2. 助ける、世話をする	1(3.0)	12(38.7)
	3. 別にいい	2(6.1)	1(3.2)
	4. 少しはいい	—	1(3.2)
	5. いやだ	3(9.1)	—
	6. その人は黒板が見えない	1(3.0)	—
	7. 無記入	8(24.2)	—

*数値は人数、()内は%、事後調査では2名欠席

- ・体験学習のコースを子ども達には未知の状態にしておくこと、コースを長くしたり、階段昇降なども取り入れる等の工夫をすることで、歩行の大変さをより実感させることができるのでないか。
- ・スライドを見るだけでなく、その後でスライドの内容について話し合う時間を作り、「ノンちゃんがなぜ4つのお願いをしたのか」まで考えさせると、視覚障害者への理解がより深められるのではないか。
- ・今回は60分授業を行ったが、それでもだいぶ内容を凝縮してある。内容の充実をはかり、子ども達にじっくり取り組ませるために、体験学習・話し合い…45分（学級活動）、スライド視聴・話し合い…45分（道徳）というふうに2時間の授業に分けて実施することを考えてみてはどうか。

(4)その他

- ・授業の導入部分で白杖を提示したとき、子ども達の目が白杖に集中しているのがビデオからでもよく分かった。今回は準備の都合上、傘で代用した

資料9. 事前・事後アンケートの問題点

- ①回答の仕方が文章力を必要とするため、子ども達には難しかったようだ。
- ②質問の意味をよく理解せず、国語の文法の穴埋め問題的に回答している子どもが数名いた。
- ③質問ⅢとⅦで、「～に対して」という言葉の意味がわからない、あるいは、これを「～に比べて」という意味に解釈して回答している子どもが過半数いた。
- ④事前・事後アンケートとも無記名にしたので、結果から個々人の変化を見ることができなかった。

資料10. 授業の感想（児童）から（………は筆者）

- 今日、スライドを見て、目の不自由な人は悲さんだと思った。それは、目が見えないと目の前にあるのが見えなくて、今いる所がわからないからだ。もし、自分が目が不自由だったらノンちゃんのようにがんばっていけるか不安だ。
- 目の不自由な人の気持ちは今日やってわかった。でも、本当の気持ちは目の不自由な人にならないとわからないと思った。ぼくは五体満足なので目の不自由な人はかわいそうだ。
- ぼく達は、目の不自由な人達に比べてずい分らくだだと思います。ぼく達が目の不自由な人だったらいやす。
- 視覚障害者の人達は白杖を使ったり、手引きをしてもらったりして歩いていることがわかりました。私はこの勉強をして障害者の人達はとてもえらいと思いました。
- ……略……私は遊びでやったことがあります。そういうふうにふざけてやってはダメだと思った。
- 私は目の不自由な人じゃなくてよかったです。それは、今日目かくしをして歩いたとき、歩くのがたいへんだったからです。でも、手引きをしてもらったときは楽でした。そしてスライドを見終わってから、これからは目の不自由な人にあったら声をかけてあげようと思いました。
- 今日、目の不自由な人がどんなにたいへんかを知りました。もし、目の不自由な人に会ったら、そっと声をかけてあげたいと思います。目かくしをして歩いてみて、目の不自由な人がこんなに不自由だとは思いませんでした。
- 目が見えないと、なかなか歩けなくて白杖がないと障害物にぶつかってしまうかもしれない。だから、目が不自由な人を見たら声をかけることが大切だと思いました。
- つえで歩くのはたいへんだなあと思いました。手引きのとき、つえで歩くのより楽だと思いました。道路で会ったら声をかけたりしたいと思います。
- 視覚障害者には、急に押したりさわったりすると倒れたりするから、手引きをしましょうかと言つてからさわるようにしようと思いました。
- 視覚障害者を見かけたら、スライドで見た4つの願いをちゃんと守れるようにしたいと思った。
- 体験やビデオを見て、視覚障害者は目が見えなくてたいへんだなあと思いました。私は今度視覚障害者に会ったら手引きをしてあげようと思いました。

が、できれば実物を使って体験させた方が良い。

III.まとめと今後の課題

本論文では、「障害児・者を理解するための福祉教育」というテーマでキャップハンディ活動を中心とした授業を考え、実践検討を加えてきた。ここで、この授業のねらいを再確認し、本論文のまとめと今後の課題について考えてみたい。

授業のねらいは資料5の(2)にあるが、筆者の意図は、「障害者理解の第一歩として子ども達にそのきっかけを与える」ことにある。授業では、このねらいを達成させるために、「白杖を使った歩行体験と手引きの体験」を題材として扱った。II章で考察したように、子ども達にとってこの授業が、障害者理解の入門として1つのきっかけになったと言えると思う。特に、日常、障害者を目にすることの少ない地域環境の子ども達にとっては、こうした授業を提供することの意義は大きいと考える。

更に、今回の授業の大きな成果として考えられることは、教師への啓発である。事後検討会で出された意見を見ても、現場の教師はこうした授業に対してその意義を十二分に感じたことは事実である。この授業が1つのきっかけとなり、以後の実践に前向きに取り組んでくれるようになることを期待したいと思う。

しかしながら、今の教育現場では、カリキュラムにゆとりがないこと、また、多忙な中で教師が研修の機会をなかなか得られないなどの理由から、こうした実践を実行に移すことはなかなか難しい現状にある。この問題を解決しない限り、教育現場でのこうした実践を拡げていくことが困難なことは確かである。

しかし、障害児・者の福祉に限らず、福祉の充実が社会問題として大きく取り上げられている昨今、教育の場で福祉の心を育てる福祉教育を重要視していくことは当然と言っても過言ではない。そのためには、今後更に学校を啓発していくことが必要となろう。

そうした課題を解決するために、現在行われている活動として、「学童・生徒のボランティア活動普及事業」がある。これは、福祉教育を全国的に普及さ

資料11. 事後検討会（授業後の話し合い）から
(※本論文に関係のある部分を筆者が抜粋したもの)

1. 授業者から

- ・最後の感想では3分の2の子どもが手助けをしてあげたいと書いていた。
- ・事前のアンケートで、自分のクラスに盲人が来たらいやだと書いていた子が3人いたが事後の感想では手助けをしてあげたいに変わっていた。
- ・自分自身も子どもたちも、この授業をやってみて、視覚障害者に対してどうしたらいいかがわかった。

2. 先生方から

- ・今日のようなことを体験した子と体験していない子とでは、全然違うのではないかと思うので、よかったです。
- ・体験することによって、どの程度のものなのか、どう接していくべきかが分かるのだと思う。
- ・盲人の不自由さは、体験した方が子どもは分かると思う。目隠しした子どもだけでなく手引きした子どもにも感想を聞いた方が、よりどうしたらよいかが分かったのではないかと思う。
- ・初めてこのような体験学習を見て勉強になった。学生の時に目隠しをしてこのような経験をしたことがある。短距離ではなく長い距離で階段など歩き、手引きと盲人の人の信頼関係の大切さを感じた。今日の授業では、目隠しした人の感想だけ聞いたので、体験した後に手引きをした人とされた人の両方の感想を聞けば、お互いの信頼関係や思いやりまで感じ取らせることができたのではないかと思う。また、ノンちゃんがなぜ4つのお願いをしたのかまで考えさせれば、もっと深められたのではないかと思う。
- ・子ども達がこれからどんなところを歩くのかがわかつっていたので、結構スムーズに歩けた。これから歩くところが見えない状態からだったら、もっと大変だったのではないかと思う。「たいへんだった」「つらいんだ」という感想だけでなく、どう接したらいいかも感想に出ていたのでよかったです。1年間テーマを設けて、総合学習として全体で取り組むようにしていけばいいのではないかと思う。
- ・手引きの方法を初めて知った。スライドを2年生にも見せたい。
- ・子ども達は、今日のような体験学習の方が、福祉とはどういうものかがよりわかりやすいのではないかと思う。身体の不自由な人や老人などとの実際の交流が必要だと思う。テレビで身体障害者を見て気持ち悪いと言っている子もある。
- ・実際に経験してみて、視覚障害者の大変さや手引きの仕方がよくわかったのではないかと思う。コースがわからなければもっと大変さが実感できたのではないかと思う。
- ・今日のような授業を体験したのとしないのとでは、全然違ったのではないかと思う。もっと遠く歩けば大変さがより実感できたのではないかと思う。目の見えない人の感覚がすごいと感じた。
- ・障害の面でひとつのことだけでもわかってくると、他の障害者の中でも理解できるのではないかと思う。コースが見えてるとだいたいわかるので、階段の昇り降りなど場の設定を工夫するともっと大変さがわかったのではないかと思う。
- ・高校生があり親切でないということが学携連で出ていた。小学校1年生から系統立てて指導する大切さを感じた。
- ・子ども達が興味本意やおもしろ半分でやってはいけない。思いやりの気持ちをもって取り組む必要がある。子ども達は真剣に取り組んでいたのでよかったです。
- ・研究主題にせまった授業だった。実体験を通しての指導が大切である。子ども達は体で覚えたのではないかと思う。広い体育館なので、もっと間隔を離していろんなコースを設けてやればより大変さが実感できたのではないかと思う。
- ・研究主題にせまった授業だった。実体験を通しての指導が大切である。子ども達は体で覚えたのではないかと思う。広い体育館なので、もっと間隔を離していろんなコースを設けてやればより大変さが実感できたのではないかと思う。

せるために、1977年から全国の社会福祉協議会が実施主体となって始めたもので、各県（市）内の小・中・高等学校の中から「社会福祉協力校」として委嘱し、福祉教育の実践を促すものである（一番ヶ瀬・大橋、1988）。

社会福祉協議会からの学校に対するこうした働きかけは、大変意義のあるものであると思う。福祉の側からのこうした啓発が、今後ますます活発に行われていくことが望ましいと考える。そして、学校と福祉機関のどちらか一方ではなく、両者がお互いにスクラムを組みながら福祉教育を進めていくことが重要であると言えよう。

最後になったが、本論文の作成にあたり、多くの方々からご協力をいただいた。まず、授業の実践に快く協力してくださった、田尻小学校の先生方に心から感謝申し上げたい。実践に際しては、校内研究の授業の一環として実施していただき、先生方全員が参観してくださったので、その後の検討会では、授業について現場の先生方の貴重な意見を知ることができた。それから、授業に一生懸命参加してくれた子ども達に感謝したいと思う。また、日本ライトハウス養成部の芝田先生には、資料の提供、アドバイス等のご指導をいただいた。重ねて感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 安藤忠ら 1987 ハンディキャップ・オリエンテーリング. 松嶺社
- 飯田貞雄 1976 福祉教育の経験—「キャップ・ハンディ」活動の試みとその評価— 山梨大学教育学部研究報告, 27, 136-145
- 一番ヶ瀬康子ら 1988 学校における福祉教育実践 I. 保育所・幼稚園・小学校 光生館
- 岸田典子・速水洋 1990 青い空と白いつえ
- 徳田克己 1989 社会の人々の態度を改善するための試み. 視覚障害, 99, 5
-24
- 村上琢磨 1986 盲人の誘導法. 社会福祉法人全国バーチェット協会